新潟教育研究所

令和２年12月15日発行　第 45 号

公益財団法人 新潟教育会
新 潟 教 育 研 究 所

〒951-8104　新潟市中央区西大畑町590-3　新潟教育会館　TEL・FAX 025－222－2971
URL http://kyouikukai.jp　E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

オンライン授業を通して
－感じた可能性と課題－

新潟大学教育実践学研究科
教授
高 木 幸 子

非対面の授業を基本としつつ，実験・実習など対面が不可欠な授業を中心に，年度当初よりも多様な実施形態で後期授業が始まった。本稿では，不慣れな中で取り組んだ前期の授業を基に，気づいた可能性と課題を整理する。

履修登録では，講義室という空間の制限にとらわれることなく受講許可を出すことができた。

準備の段階では，授業内容を通して伝えたいことは何か改めて考える機会になった。対面であれば受講学生の表情を確かめながら調整できるが，今回は画面越しである。ネット環境が様々であることから，顔を出さなくてよい状態で授業を進める。学生に考えて欲しいことは何か，どのような資料を提示し，どのように話しかければ，学習にかかわる問題意識や授業づくりへの興味を高めることができるのか。考えを巡らせ，良いと思うことを行ってみるしかない。

ある時，家庭における防災の内容を扱った。災害時用にストックしている食品について，チャットでの回答を求めると，勢いよく保存食品名が書かれてくる。何人かに具体的な紹介を促すと，ある学生からは自身が被災したこと，準備をしていないと不安になること，３か月に一度は家族と点検して入れ替えていることが語られた。この話を聞いている最中にも，チャットが入ってくる。自宅か下宿で受講していて，気になったのだろう。「話を聞いていて，保存していたパックごはんを確認すると賞味期限切れでした。」などと状況報告も入ってくる。実質的な距離は遠くても，チャットを通して反応を得たり，即時的に言葉を共有できたりするからだろうか，対面で行う授業とは異なる臨場感がある。

また，この授業では，学習内容別に26のグループを編成し，３回の協議の時間を確保して小学校高学年の家庭科授業を構想した。協議も報告会も，オンラインでのグループ活動として実施した。後日提出された記述から，授業構想の良さや工夫について，学び合っていたことが読み取れた。計画段階では充実した協議が展開されるか不安もあった。しかし，メンバーを固定して協議を繰り返すことで，構想授業の相互理解を進め，集中して話し合う場になったことが伺えた。

もちろん課題もあった。学生の参加協力を得て行っていた簡易実験などができなかったことだ。実験を録画・編集して提示することで，目には見えない汗（不感蒸泄）が手袋にたまる様子を示すことはできたが，蒸し暑さや不快さなどの実感を共有することはできなかった。

現在，学校教育におけるICT化が推進されている。オンラインで進める授業の強みと対面授業ならではの強みをどのように見極め，つなぐことができるのか。優れた教材や実践を通して得られている方法に関する豊かな知見は，どのように共有財産として活用していけるのか。今回の取り組みから多くのことを学ぶとともに，この急がれる検討課題に取り組む必要性を強く感じた。

伝えたい教師の心と技(44)

社会科の停滞を打破するために

新潟教育研究所 教育アドバイザー
有田一正

はじめに

上記タイトルは，今年50周年を迎えた越佐社会科研究会の初代会長樋浦辰治氏の昭和50年から発行された全３巻の著作の題名である。社会科発足期に問題解決学習に取り組んできた同氏が，その後30年経った時期の状況に対して，警鐘を鳴らしたものである。

それから40数年後の現在，社会科の授業づくりについて，以下私の思いを記述したい。

１　若手に　導入から学習課題づくりを

日々の授業や各種研修の授業で，ぜひ若手には授業の前半の導入時の教材提示，本時の学習課題づくりにしっかりと取り組んでほしい。

各社の教科書には，「この時間の問い」や「活動（学習の進め方）」などが書かれている。これを参考に身近な素材を教材化して，提示の仕方を工夫すると，児童の驚きや疑問が生じ，本時の学習課題づくりにつなげることができる。

例えば，３年地域の生産の授業で，新潟市西区の「いもジェンヌ」を取り上げ，他県の産地の芋と並べて提示し，違いを考えさせるなど，事前の取材と教材づくりにより，オリジナルの課題で勝負する授業を，積極的に行ってほしい。

２　中堅に　問題解決の単元づくりを

前述の樋浦氏の著作に，ご自身の昭和24年の実践，４年「用心溜（だめ）」が紹介されている。これは，問題解決学習のお手本になる。

導入で，火事の損害高から「火事はおそろしい」と児童に感じさせる。展開では，「消防施設はどうなっているか」調べ，これで大丈夫かと問題意識をもって，施設の効力や分布など学習を進め，防火で足りない点は対策を考えていく。終末は村の助役を招き，学習の成果を伝えている。また「出来ることをしよう」として，火の用心の呼び掛けや夜まわりなどがあげられている。

新学習指導要領では，児童の主体性を生かした問題解決的学習（下線筆者）が求められている。単元を貫く学習問題を，児童が粘り強く追究していく授業こそ社会科の目指す授業である。単元を通じて，児童の成長を示せる実践に挑戦してもらいたい。さらに成果を，研究会等で広めてほしい。

３　ベテランに　今こそ授業研修を

管理職や級外になり，社会科授業をもっていない人も多い。今までに築いた授業づくりに関するノウハウや情熱が埋もれたままで，教職人生を終えるのは惜しい。

社会科の公開授業が少なくなった今こそ，ベテランが若手や中堅に声を掛け，校内や近隣に公開する社会科授業研修を多く興してほしい。指導者役だけでなく，自身が授業者として，「言葉だけでなく，姿で語る（伝える）」こともあっていいと考える。

６年「明和騒動」有田授業　平成26年９月

４　終わりに

昨年から新潟市内の専門学校で，大学と併学して小学校教員免許を取得する学生に，社会科指導法を教えている。

改めて私も学びつつ，「社会科の停滞」はどの時代でも，そして今も打破すべく取り組んでいかなくてはと思っている。

「就活　しゅうかつ(修活)　終活」

新潟教育研究所 研究員
宮川由美子

はじめに

「そのうち２階が落ちる！」怒る母。○○小学校，△△小学校，□□事務所，勤務先ごとの段ボールが山積み状態。◇◇小学校の段ボールに使いたい楽譜が入っているのが分かっていても，開けるのがおっくうで，つい買ってしまう。おかげで，同じ楽譜や同じ本が手元に溜まる。

１　「就活」

週に１回３コマ，ある私立大学で教員を目指す学生と既卒生への講義を行っている。2020年２月からの講義はコロナ禍により，対面では実施できず，リモート授業で対応するしかなかった。しかし，採用試験２次へ向け，厳密な対策を講じた上での対面授業が許可され，酷暑の最中ありったけの汗を流して彼らとタッグを組んで臨んだ。秋頃に，その結果が各自治体から次々に発表される。「何でこの学生（既卒生）が？」と不採用に疑問を感じるのもいつものことである。その逆もしかり。この時期我々教員の最大の役目は，涙をのんだ学生（既卒生）が「目指した道」を諦めずに再度歩みを進めてくれることへの支援である。彼らは，これから一年間「就活」が続く。ほとんどが講師をしながらリベンジを目指す。採用人数が少ない自治体や教科に挑戦する学生は，これが２回３回となることも珍しくない。私は拳を握る。エールを送り続けるぞ！あの顔が笑顔ではち切れるまで。

２　「しゅうかつ（修活）」

「100年前の女の子」船曳由美（文藝春秋）を読んだ。明治の時代に栃木県の農村で生まれた女の子が，何を感じ何を学びいかに生きたかという実話である。筑波尋常小学校で担任だった「わたなべせんせい」は本教員ではなく代用教員，よく通る声が歌うように響く先生だった。

「わたなべせんせいは窓の近くに立ち，外を向いて声を一段と大きく張り上げて本を読んだ。校庭を見ると，窓近くに子守奉公のヤッちゃんが立っている。わたなべせんせいは，文字を書くときも黒板の窓寄りの端に大きく書いた。ヤッちゃんは背伸びをして黒板を見てから，棒きれで地面にその字を書いていた。」

わたなべせんせいはずっと代用教員だった。でも，大人も子どももこの先生を大好きだった。

「しゅうかつ（修活）」は私の勝手な造語なので悪しからずお許しを。「自分の信念で生き生きと行動する時代＝現役時代」とした。この原稿を読んでくださっているあなたは，どんな先生だろう？先輩の方々は，どんな先生だったのだろう？私？私は「二十四の瞳」のおなご先生（大石先生）を夢見ていた筈なのだが・・・。

３　「終活」

他人に言われるまでもなく，私は「終活」の域に達している。でも，認知症や病気，介護等からは目をそらしている。（今年の人間ドックでは，凄まじい数の精検だらけだったくせに）

船に乗り未知の国への旅行，犬の飼育，温泉ソムリエの世界，スキューバダイビングのインストラクター等々，目まぐるしかった現役時代には夢見たことが一杯あったはずなのに。何故か，そんなことは少しずつ色褪せはじめている。友人たちの多くは，身辺整理という「終活」を着々と進めているようだ。ある意味尊敬する。私は，きっと，最後まで自分の思うように生活をし，俗に言う「しじゃらほじゃら」散らかしっぱなしでサヨナラするのだろう。

おわりに

考えて考えて考え抜いて処分する本を，やっと一縛りつくった。本の処分は進まないが，服やスカーフをゴミ袋に詰め始めたら止まらない。このスーツは新任校長になったときに買ったっけ，このブラウスは失敗だったなあ，これは勝負服だったなどと独り言を言いながら・・・。

第12回教師力アップ講座

期日　令和２年11月７日(土)
会場　新潟教育会館

～受講者の声から～

第１講座

「特別な支援を必要とする子がいる
学級経営・学習指導」
～ＵＤＬの考え方を取り入れて～

講師　加茂市立加茂西小学校　校長
古田島　恵津子　様

◆　私たちは，つい，子どもの特性を原因にしてしまいがちだが，子どもが「どうやったら学ぶか」を常に考え，子どもの視点に立って授業改善していくことが大事だと改めて思った。

◆　動画や具体的事例から指導方法を学び，自分自身の日頃の子どもへの接し方，考え方を振り返ることができた。コロナ禍ではあったが，少人数での意見交換ができた。

◆　支援を必要とする子どもたちは個性豊かで，ひとくくりにできない。それだけに，今後も研修を重ねたい。また，子どものせいにしない応用行動分析は現場にどんどん取り入れる必要がある。

第２講座

「学年に応じた外国語の授業づくり」
～育てたい資質・能力をどう育てるか～

講師　新潟市小学校英語教育推進リーダー
新潟市立味方小学校　教頭
村上大樹　様

◆　原点に戻ったような内容の講座で，「やっぱり授業ってこうあるべきだよなあ。」と背中を押されたような気分になった。特に，１年生向けの実践が面白く，アレンジ次第では３・４年生でも実践できそうだと感じた。

◆　４月から教員として働き始めて，初めて研修会に参加させていただき大変有意義な時間を過ごせた。まだ，外国語の授業をしたことはないが，学年や子どもの実態に応じて楽しめる授業が大切だと思った。外国語だけでなく他の教科にも生かしていきたい。

◆　「音」でのインプットの重要性を改めて知ることができた。

教育アドバイザーリストについて

今年度，新たに教育アドバイザーとして登録いただいた17名の皆さんを対象とした「教育アドバイザー説明会」を，10月31日(土)に実施しました。皆さんのこれまで培われたお力を情報交換し，今後のアドバイザー活動の充実が予想されるひとときとなりました。この17名を含め，計121名のアドバイザーの皆さんが，様々な面から教育現場のお手伝いをさせていただきます。

なお，今年度から「個人情報保護」のため，教育アドバイザーの住所と電話番号をリスト一覧には掲載しないことにしました。活用につきましては，お気軽に新潟教育会館にお問い合わせください。また，リモートによる教育アドバイザーの活用もスタートしましたので，こちらも，お気軽にお問い合わせください。